

今年もデトロイト美術館から目が離せない

今年1月下旬、東京・上野の森美術館で開催されていた『デトロイト美術館展』が閉幕しました。昨年初夏には豊田市美術館、夏には大阪市立美術館と、日本の3都市を巡回して行われていたこの展覧会は、会期を一か月残して累計来場者数50万人を突破したことに加え、会場内で写真撮影ができることでも大きな話題となりました。展覧会を見に行か
れなかった方でも、麦わら帽子をかぶったゴッホが眼差しを向けている黄色いポスターに、どこかで出会われたのではないのでしょうか。

デトロイト美術館の英語名は“Detroit Institute of Arts”で、略して「DIA」と呼ばれています。日本での展覧会では近代ヨーロッパの絵画コレクションの一部を紹介していましたが、DIAには多くの陳列室（ギャラリー）があり、中世・近世の作品も多く展示されていますし、紀元前のエジプトや中東の美術をはじめ、イスラム文化圏、そしてアジアなどの美術も鑑賞することができます。収蔵品は6万点を超え、全米でもトップクラスの美術館です。デトロイト市の財政が苦しい時期には、美術品の売却という大変な危機に直面したのですが、市民が自分たちの財産を守ろうと声を掛け合い、美術館の存続につながりました。市民に愛されるDIAの姿は、昨年、原田マハさんが『芸術新潮』の連載『デトロイト美術館の奇跡』で描いていました。



週末は多くの来場者が訪れますが、館内がと
ても広いため、一つ一つの美術品をゆっくり楽しむことができます。子どもたちが作品に興味を持てるような工夫もなされていて、家族連れの方も多くみられます。

そのDIAで、今秋、日本美術に特化した新たなギャラリーが開設されることになりました。これまではアジア美術の一つとして、中国・韓国・インドなどの美術品と一緒に日本の陶磁器や書画が並んでいましたが、新たな日本ギャラリーで更に充実した展示が期待されます。これに併せて、日本の伝統文化を紹介するイベント「Japan Cultural Days」も11月4日と5日に同館内で開催されます。このイベントにはミシガン州との交流の一環として滋賀県も協力させていただき、「近江の茶」で来場者をおもてなししたいと考えています。

ところで、デトロイトと日本美術との関係では、DIAの近くのフリーアハウスも有名。これは、鉄道貨物車両の事業で成功したチャールズ・ラング・フリーア（1854-1919）の旧宅で、彼が集めた日本美術をはじめ東洋美術の一級品が収蔵されていたそうです。これらのコレクションは、現在はワシントンD.C.のフリーア美術館に移されていますが、フリーアハウスは現存し、イベントも開催されています。